



冬の寄せ植えを彩る 葉牡丹

秋も深くなり、寒さを感じるようになると、パンジーやビオラの苗に混じって、華やかに色づいた葉牡丹が出回ってきます。昔は葉牡丹というと、30cmほどの直径になる大きな地掘り物がほとんどで、主に正月飾りの植え込みに使われたのですが、最近はそんな大きな葉牡丹はすっかり見かけなくなってしまうしました。

代わりに主流になっているのが、いわゆる「ポット葉牡丹」と呼ばれるミニサイズの葉牡丹で、家庭の花壇や寄せ植えに欠かせないものとなっています。ポットサイズは4号(12cm)〜3号(9cm)がメインですが、さらに小型花も進み、6cmポットで作られたミニミニ葉牡丹まで登場しています。大きな地掘りものは正月飾りや公共の花壇など限られた使い道しかなかったのですが、扱いやすいポット葉牡丹が登場したことによって、利用シーンが増え需要が一気に拡大し、この時期には欠かせない草花の一つとなっています。

ポット葉牡丹が出回るようになったのは、20年ほど前からだと思いますが、その人気を決定づけたのは、12年前に神戸の生産者が立ち上げた「神戸ジェンヌ」



ミニシクラメンと組み合わせた
洋風の寄せ植え



和風の寄せ植え

のブランド戦略でした。綺麗なラベルとそれぞれの品種や仕立て方のネーミングだけでなく高級感あふれるポスターとの相乗効果で、それまでは何となくあか抜けない安物のポット草花だった葉牡丹が、1ランク上のオシャレな草花としてイメージアップがなされたのです。

実は品種が豊富です！

同じように見える葉牡丹ですが、品種の数は意外に多く、葉の形もいくつかの系統があります。大きく分けて葉が平滑な丸葉系と葉先が縮れたちりめん系、そして細かく切れ込みの入った切れ葉系があります。色彩は赤と白の2色が基本ですが、淡いピンクに色づく「つぐみ」などの品種もあり、特にこの色彩は人気があつてたくさん出回ってきます。

仕立て方も進歩し、1ポットに3〜5株をまとめて植えたスプレー葉牡丹や、切花用の高性種を摘芯して枝分かれさせた踊り葉牡丹等、寄せ植え材料として使い勝手の良いものがたくさん登場しています。特にミニサイズに作ったスプレー

葉牡丹は、まるでミニバラのブーケのようで、寄せ植えを非常に華やかにしてくれます。

植え込みのポイント

使い勝手のよいポット葉牡丹ですが、植え込みにはいくつかのコツがあり、それを理解しておくことが上手に活かすポイントといえるでしょう。そのひとつが「色づいた葉牡丹はこれ以上大きくならない」ということです。パンジーやビオラなどは植え付けた後、春までにどんどん大きくなるので、ある程度株間を空けて植え付けするのが常識ですが、葉牡丹は大きくならないので、株間を空けず葉が触れ合う程度の間隔で植え付けます。もうひとつは植え付ける深さです。普通の草花は根鉢を深く埋め込んでしまうと根腐れしてしまうため深植えは厳禁ですが、葉牡丹は大丈夫です。逆に他の植物との高さのバランスを揃えるために、根鉢を埋め込む深さを調節します。